

2021 年度 茨城キリスト教大学 FD 報告書

授業改善委員会

(2022 年度)

2022年5月9日

学長 上野 尚美 殿
副学長 梶田 泰孝 殿
文学研究科長 David C. Yoshiba 殿
生活科学研究科長 石川 祐一 殿
看護学研究科長 松永 恵 殿
文学部長 池内 耕作 殿
生活科学部長 山中 俊克 殿
看護学部長 栗原 加代 殿
経営学部長 申 美花 殿

授業改善委員会 2020・2021 年度委員長
生活科学部心理福祉学科 岩崎眞和

平素より、授業改善委員会活動にご理解とご尽力賜り感謝申し上げます。本学「授業改善委員会規程」第3条の4)により、以下に2021年度に行われました各研究科、学科の授業改善活動についてご報告致します。COVID-19の感染予防の徹底とオンライン授業も随時展開した21年度ですが、下記のFD研修が実施されました。

全学FD

報告者：岩崎眞和

1. 実施目的：

昨年度の大学認証評価を受けて、本学の現状分析と課題の明確化を目的に京都橘大学副学長の阪本崇先生と同大学の谷川悟史企画部長のお二人をお招きして全学FDを実施した。

2. 概要：

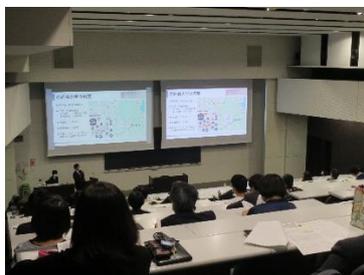
研修テーマは「京都橘大学における教学改善に向けた全学的取り組み—マスタープランとアセスメント・ポリシーの作成を事例に—」であり、21年10月26日（火）16時15分～18時00分（8101）に行った。当日の参加教職員は70名であった。なお、昨年度と同様に本FDの録画動画を欠席者にも配信し、本学全教職員が情報共有可能な環境設定を行った。

3. 研修内容：

本研修では京都橘大学のマスタープランの概要と、アセスメント・ポリシーの策定および試行錯誤プロセスについてご講演をいただいた。マスタープランは長期ビジョンと

中期プラン、年度計画の大きく3つの実行ステージから策定されており、その遂行に向けた「マスタープラン委員会」の設定が示された。加えて、マスタープラン・アワードを創設することで、学内でのマスタープラン遂行における各セクションのインセンティブを高める工夫もなされており、これらが相互循環的に機能することで京都橋大学が建設的に拡大しているように思われた。また企画部長のご講演からは、事務、企画のスタッフや計画立案、遂行も大きく影響していると考えられた。

アセスメント・ポリシーについては、認証評価でICの課題として指摘された部分であったが、京都橋大学においてもICより進展しているものの類似の状況、課題を有しているようにも思われた。まず本ポリシーは大きく3つのレベル（大学レベル、教育課程レベル、科目レベル）から構成されており、教育課程レベルでの調整が最も困難であったようである。したがって、京都橋大学ではこのレベルの調整を最終段階に位置付けてポリシー策定を行ったようであるが、おそらくICでも同様のステップを踏む可能性がある。フロアからは、マスタープラン委員会メンバーの構成の具体、地域貢献における「地域」の操作的定義、ICの認証評価を受けての雑感などいくつかの質問があがり、活発なディスカッションが展開した。



全学教養課程センターFD

全学教養課程センター報告者：三橋翔太・江尻桂子

- 実施日時：2021年12月11日（土） 13:30～15:30
- 実施形式：Zoomによるオンライン開催
- 講師：三輪健太氏（文学部現代英語学科）・荻津智絵氏（情報センター）
- 参加者：22名：

□ 実施の背景と目的：

新型コロナウイルス感染拡大を受け、20年4月より本学でもオンライン授業が開始された。多くの教員にとって、オンラインによる授業実施は、初めての試みであり、動画の作成や、ライブ配信、ハイブリッド授業の実施等、多くの業務に追われた。いっばうで、こうした活動を通して改めて、大学での授業の在り方について考える機会となり、教職員のあいだでも多くの学び合いがあった。本研修では改めてこの1年半のオンライン授業を振り返り、各々の教職員が苦勞した点や工夫した点、また、今後の課題などについて意見交換を行う。

□ 実施の流れ：

第1部では、三輪健太氏（文学部現代英語学科教員）と荻津智絵氏（情報センター職員）より、オンライン授業に関する話題を提供いただいた。第2部では、参加者が3人ずつのグループに分かれ、意見交換を行った。最後に2名の話題提供の内容および、グループでの意見交換をふまえ、全体討論を行った。

第1部：話題提供：

□ 三輪健太氏：「IC-Teams を用いたポストコロナの授業の展望」

Teams を用いた授業実践について報告が行われた。具体的には、資料の配布方法、課題の提示方法、Wiki の使用方法などが紹介された。また、これらを授業で活用することにより話題提供者が感じる利点などが報告された。さらに、Teams の活用の可能性として、複数のクラス間や、複数の教員らの間で横断的に資料や課題を使用できるような活用方法も提案された。

□ 荻津智絵氏：「Microsoft Teams を活用したオンライン授業のポイント」

昨年度新たに追加された Teams の基本的な機能や、昨年度より安定度が増した機能（トランスクリプトや出席者レポート、カメラのピン留め・スポットライトなど）について紹介された。また、グループ活動の際に、デジタル学習を促進するための方法の1つとして、ファイルを共有する方法が紹介された。最後に、Forms を活用したオンラインでのテストや課題の提示の方法などについて解説が行われた。

第2部：グループによる意見交換

参加者が3名ずつのグループに分かれて、オンライン授業での利点や問題点、課題について意見交換を行った。そのあと、各グループの代表者が、意見交換の内容について報告し、これを参加者全員で共有した。

全体討論

第1部の話題提供や、第2部のグループでの意見交換会をふまえ、全体討論が行われた。具体的には、Teams を用いた授業実践をはじめ、デジタルと紙媒体のそれぞれの利点を生かした授業実践の在り方、ハイブリッド授業の難しさなどが話し合われた。また、ICT の機能をどう段階的に導入していくのかということや、今後の BYOD の導入について、さらに、教員間でのオンライン授業に関する情報共有の必要性について話し合われた。

参加者による研修の振り返り—今後の授業改善・FD 研修会に向けて—

研修終了後に、参加者から寄せられた感想や意見を以下に紹介する。これらを今後の授業改善やFD 研修会の企画に役立てていきたい。

○全体的な感想：

参加させていただきありがとうございました。とても良かったです。／対面授業で先

進的な ICT 活用をしていらっしゃる先生方が、「こんなふうに使っています」とみんなの前で披露する。今後ずっと、そういう FD が必要だと思います。本日もそんな FD で大変良かったです。／いろいろな話を聞いて有意義でした。／本日はありがとうございました。個人的な視点と、俯瞰的な視点から拝聴・拝見しました。学生の立場に立って、より効果的な授業を展開する様式、参考になります。／勉強になりました。自分の授業についても、いくつかヒントを得ることができました。ありがとうございました。／三輪先生の報告では、Forms, Stream, OneDrive, Wikiなどを Teams のチャンネル内でリンクさせて、補助資料などに活用されている例は、大変参考になりました。様々なアプリを目的別に活用して、それらを統合して活用されているのは素晴らしいです。参考にしたいと思います。また、萩津さんからの Teams の新機能の紹介も参考になりました。今後、コロナウィルスの感染が終息して対面授業が中心になったとしても、ゼミ科目の中で Teams 上での PPT の共同編集作業などはそのまま活用できますので、BYOD を前提にゼミ授業時に Teams に活用したいと思います。／他の先生方の授業実践や、どのような課題があるのかなど伺うことができ、大変参考になりました。／日ごろお話をする機会が少ない先生たちのオンライン授業に対する意見を伺えるいい機会でした。／勉強になりました。自分の授業についても、いくつかヒントを得ることができました。ありがとうございました。なお、最後の小学校のデジタル化の話ですが、お話ししたように進んではおりますが、過日、多文化協働の授業で疑似外国旅行体験を小学生にしてもらいました。色々デジタルを駆使しましたが、一番、小学生にうけたのは、手作りの出国・入国スタンプでした。身体論の話が出ましたが、デジタル化と同時に手書き・筆書きや、紙ベース、本ベースの対応が逆に重要になってきます。

○今後に向けての課題や改善案：

今後 OneNote の上手な使い方やブレイクアウトルームで授業を行っている先生の展開を伺いたいと思いました。／特にブレイクアウトルームのディスカッションはとても有意義でした。このような研修会は定期的に（2ヶ月に一回など）をやると全体的に FD がさらにできると思います。／パソコンをいじりながらの使い方講習会を、萩津さんと教員有志協働で、1回ではなく1時間ずつ、数回連続（時間を空けて身につける必要がある）で計画していただきたいです。／今日の参加者はオンライン授業に抵抗のない方が多かったと思われますが、オンライン授業に関心のあまりない方にも聞いていただけるとよいと思いました。

文学研究科

【英語英米文学専攻】 専任教員 7 名（学長・育休中教員除く）

題目：“High Frequency Words and Listening Comprehension: If you can't hear the word, do you really know it?”（高頻度語と英語聴解：聞こえないのは本当はわかってないから？）

内容：外部講師によるオンライン特別講座の受講（講座内のワークショップを含む）

講師：ブレント・カリガン博士（青山学院大学）

日時：2022年2月26日（土）9時～17時20分、27日（日）9時～17時20分

参加：専任教員5名（+学長+現代英語学科教員3名+大学院生1名+学部生3名）

文学部

【現代英語学科】（専任教員11名（学長のぞく））

1. 前期（5月～7月）

題目：授業見学・評価・フィードバック

参加：10名「教員担当授業／参観授業一覧」参照

概要：現代英語学科専任教員間において授業見学を行い、当該の教員間においてフィードバックと建設的批判を目的とする意見交換を行った。

考察：見学した授業内容に関する意見交換は教員間で個人的に行われた為、以下は授業改善委員（舘野真）の個人的な意見である。本FD活動を通して、アクティブラーニングを基礎とする授業実践、オンライン授業を行う上での創意工夫および機材構成等、学生に寄り添う授業の在り方について有用な示唆を得た。今後の発展の可能性として、学科内で実施される授業の連携によって学習効果と学習成果の向上を期待できるのではないかと思われた。

2. 後期（11月）

題目：TBLT (Task Based Language Teaching) ワークショップ

内容：Help students SPEAK WITH CONFIDENCE through TBLT Presentation & Workshop

講師：沼館 ジェニー（本学 文学部現代英語学科 講師）

日時：2021年11月26日（金）17:40～19:10 11203 教室

参加：現代英語学科教員10名（兼任講師参加者含めて11名）

概要：下記パンフレット内容参照

**Help students
SPEAK WITH
CONFIDENCE**
through TBLT
Presentation
& Workshop

2021年11月26日（金）
11号館 11203教室
17:40 ~ 19:10

現代英語学科 沼館ジェニー 講師
Jenny Numakubo
Lecturer / Associate Professor
Department of Contemporary English

事前申し込み方法 Pre-registration
・QRコード 又は
<https://forms.office.com/h%20UmsUJ>
email : mtateno@cc.ac.jp

Most Japanese students have studied English for at least six years when they enter university, yet few of them have enough confidence to speak it. How can teachers help them?

In this presentation, the instructor will explain the differences between popular (PPP) methods and TBLT discussing the advantages and disadvantages of each method. In a workshop, she will demonstrate how TBLT (Task Based Language Teaching) methods can be applied in EFL classrooms to encourage students to speak English and help them build confidence.

日本の学生の多くは、大学入学時に少なくとも6年間英語を学んでいるにもかかわらず、自信を持って英語を話すことができる人は少ない。どのように学生を助けることができますか？

本講演では、よく使われているPPP方式とTBLT方式の違いを説明し、それぞれの長所と短所を紹介いたします。そして、ワークショップでTBLT (Task Based Language Teaching) の手法を話し教室でどのように適用すれば、学生が英語を話すことを奨励し、自信をつけることができるかを説明いたします。

The presentation will be done in English. 講演は英語で行います。 連絡先： 沼館員 mtateno@cc.ac.jp

【児童教育学科】（専任教員 24 名）

1. テーマ：「基礎演習の振り返り」
2. 担当：授業改善委員 池内 耕作
3. 実施日時：2022 年 2 月 15 日（火）14：50～16：10
4. 会場：3 号館 3306 教室
5. 参加者：児童教育学科専任教員 24 名中、対面参加者 14 名、オンライン参加者 4 名
6. 概要

（1）基礎演習(Pe)

- 2021 年度から Pe 1 年次生を対象に開校することとなった「基礎演習」について、昨年度の FD ではそのコンセプトの共有、質保障の観点からの目標設定の説明や意見交換等を実施した。今回はその計画に基づき、実施を振り返る評価を主軸に FD を行った。
- 学位授与方針に掲げる 5 つの能力について、能力向上に関する履修者の自己評価点が、どの能力についても「5 点満点中 4.5 点以上」とする目標を立てていたが、全項目についてわずかに及ばず、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」が 4.4 点、「学習に主体的に取り組む態度」が 4.2 点、「実践的ボランティア」が 4.1 点、「公正性」が 4.3 点という結果であった。次年度も同じ目標値を掲げ精度をあげてゆく。
- その意味でも、履修者アンケートで寄せられた自由記述部分の分析を詳細に行った。改善要望については特に「ひとつひとつのトピックをより掘り下げる」「各グループ間の交流や意見交換の頻度を増やす」の 2 点について、次年度は注力・改善していくことを確認した。
- すべての回答者が、この授業について好意的なコメントを寄せていることを最後に確認した。教師陣が掲げた目標に合致する多数のコメント（例えば著作権保護をはじめとする研究倫理や、仲間どうしのコミュニケーション、自己理解等々について「向上した」との感想）を得たので、これらの成果を今後も成し遂げることができるよう尽力してゆく。

（2）基礎演習(Pc)

- 幼児保育専攻では上記の Pe 専攻に先立つ 2013 年度より、それぞれのクラスで異なる内容ではなく 1 年生全員が「同一の内容」を学ぶべく、各クラスの内容の統一化・組織化を行った。
- その主たる方途は、担当する全教員がそれぞれの役割を持ち、オムニバス形式で一斉指導したり、共通のテキストに基づいて各クラスで演習的な作業を行ったりすることであった。
- 15 回の計画は、大きくは「大学生活に向けて」と「幼児保育専攻生として」の 2 つに分けられる。2021 年度実施分の受講者アンケートにおいて、「この授業があなたの学びにとって役立ち、成長させてくれた理由」に関する自

由記述では、前者では「スタディスキル」「仲間づくり」「レポートの書き方」「キャリア支援」といった語が、また後者に関しても「実習体験」「実習日誌の書き方」「実習指導案の書き方」「実技：身体表現」p 実技：音楽」といった言葉が頻出しており、教師陣が強調・重視した事柄と重なっていることを確認した。このことはひとつの成果と考えることができる。

- 2021 年度の課題としては、共通資料の作成を断念したことが挙げられる。過去、製本テキストを作成して活用してきたが、感染症予防対策の一環として配付を中止。また、内容的にも再考する時期に来ていることから、今後の授業の統一性について検討する必要がある。

【文化交流学科】

昨年度の文化交流学科の Faculty Development は、後期の 10 月に「韓国の大学におけるオンライン・ICT の対応と、韓瑞大学校の現状と課題」と題した講演を、本学の交流校である韓瑞大学校准教授であるイ・サンフン氏（通訳：韓瑞大学校金泰ド教授）にお願いし、デジタル先進国である韓国の大学教育の状況を踏まえて、本学や学科のオンライン状況を客観的に捉え直す契機としました。

今年度は、留学生を多く迎えることを目標とする C 科にとって、何を見据えるべきなのかを、教員自身が深く学ぶ場にしたいと考えました。そこで、ベトナムから来日した外国人労働者（とくに技能実習生）が、どのような状況に置かれているのかを、実話を元に再構成した映画を鑑賞することにしました。周知のように、本学にはベトナムをはじめ、東南アジアからの留学生も多く、ベトナムからの労働者状況の把握は、留学生の背景を知る上でも重要と考えております。

その映画とは、2021 年度、新藤兼人賞の金賞を受賞した『海辺の彼女たち』（藤元明緒監督）です。この映画の上映は、2022 年 2 月現在も進行中ですが、自主上映という形が可能になっており、この自主上映を主幹する NPO 法人 日本・ミャンマーメディア文化協会から DVD を送っていただき上映いたしました。

上映期日：2022 年 1 月 25 日（火）午後 2 時 25 分～3 時 55 分

場所：11 号館 11301 教室

参加者：文化交流学科教員 12 名

当初は学生にも参加を募りましたが、新型コロナのオミクロン株の流行により、教員のための視聴となりました。視聴後、多くの先生方から優れた映画だった、学生にも視聴させたかったとの感想が寄せられました。私も優れた映画作品だと思いました。その感じ入った点を二つほど述べてみます。

一つは、技能実習生たちの日本での環境や、その実習生たちが不法労働に走るというのは、テレビなどのニュースで「事件」としては、よく知っているわけですが、その「事件」の背後には実習生たちの人生や家族や恋愛があるということです。「事件」として

見れば、実習生を「可哀そうだ」「でも不法労働はよくない」など紋切り型の対峙しか出来なくなります。しかし、この映画では実習生たちの人生を深くえぐって、一人一人に違う人生があることを浮き彫りにしてくれました。私たち教員が留学生に対峙するとき、やはり出身国のイメージが先行して一人一人の違いを見落とすことがあります。それを改めて教えられたように思いました。

二つ目は、この映画を作成する監督やスタッフが、実習生たちの実情を細かくリサーチしていることです。それがよく分かるのは、この映画のパンフレットです。

普通、映画のパンフレットと言えば、監督さんの話や俳優さんたちの写真と実績・演じての感想、周囲の評判などが主ですが、このパンフレットにもそれはありますが、パンフを開いた最初のページには、本作の「背景をより深く把握するために」として、技能実習生制度の実態を数字等を挙げて解説してあります。また、その次のページは「実録」として失踪した実習生のケースを二つ上げて、その二人の言葉が通訳を通して書かれています。

映画を視聴した後で、このパンフを読むと、改めて映画のシーンを思い出すとともに、再度映画を視聴してみたくくなります。つまりこの映画は、視聴者に単に一時の感情を引き起こすことでなく、深く真摯にこの問題を考えてもらうことを願っているのだと思います。次年度の授業でも、この映画を視聴することを学生に薦めてみたいと思います。この映画を制作された監督さんやスタッフの皆さんに心より感謝を申し上げます。

〈参考〉

<https://umikano.com/> 『海辺の彼女たち』公式サイト

予告編の動画などの閲覧が可能

<https://exnkk.stores.jp/> 『海辺の彼女たち』パンフレット制作のサイト

パンフレットの内容説明や購入方法等

報告者：文化交流学科主任 染谷智幸

生活科学研究科

【生活科学研究科（心理学専攻）】

1. 実施目的

2021年度に心理学専攻では初めての大学院生の修了生を送り出すこととなった。それと併せて、開設後2年で完成年度を迎えるにあたって、修士論文作成プロセス、心理実践実習運営、カリキュラムなどの見直しと、23年度からの新カリキュラムの大学院運営に向けた情報共有とブレインストーミングを専攻構成メンバーで行った。

2. 概要

参加者は心理学専攻構成教員の5名であった（22年2月8日10時-11時半）。渡邊先生より、修士論文指導プロセスとその過程内での改善可能点について話題提供して

もらい、要項修正に反映できるようにした。報告者である岩崎より実習指導プロセスについての改善可能点と、現在の実習候補先の確認があり、来年度以降の臨床指導体制の見直しについての提言があった。その後、本専攻設立コアメンバーの黒澤先生より、大局的かつ歴史的展開も踏まえた上で本専攻の課題についての提言があり、今後の解決に向けたディスカッションが行われた。最後に、全体を踏まえて運営委員の青木先生より大学院カリキュラム全般、制度、枠組みについての課題の提示があり、それらを皆で共有しながら、ディスカッションした。

3. 考察

公認心理師養成の大学院課程はようやく 21 年度をもって一巡した。その過程で、コロナ禍ということもあって想定とは大きく異なる運営をせざるを得ない状況も多く、ポストコロナ時代に適応した、IC らしさを生かした大学院運営が今後求められる。各プレゼンターから課題提言が資料としても提示されたため、これらを下地に 22 年度以降の改善につなげていきたい。

報告者：岩崎

生活科学部

【心理福祉学科】（専任教員 13 名）

日時：2022/3/15 10:00～12:00

場所：オンライン

内容：昨年は Teams 上で展開した学科 FD であったが、今年度は渡邊孝憲特任教授の退職記念最終講義への参加をもって W 科学科 FD とした。本学大学院心理学専攻の設置に大変にご尽力賜った渡邊先生の最終講義を行った。対象は学科学生、教職員を中心としながらも外部の対象にも開かれた形で実施し、最終的に合計で 60 名前後の受講者が集まった。本学園とも所縁あるロジャースの来談者中心療法をベースとしながらも、クリシュナムリティの思想的影響を受けた独創的な心理臨床的視座をご講演いただいた。

報告者：岩崎

【食物健康科学科】（専任教員 16 名）

日時：2021 年 12 月 7 日 16:00～18:15

場所：7 号館 7101 教室または Teams

参加者：専任教員 16 名（1 名欠席）

テーマ：大学院と大学の将来構想を考えるーカリキュラム改訂も視野に入れてー

1. 実施内容

日本における栄養政策および高齢化の現状を大学院研究科長 石川先生よりご講演をいただき、今後、本研究科および学科として将来何を指すべきか等を含む将来構想を視野に入れて研修した。グループディスカッションでは、2024 年カリキュラム改訂に向けて、下記の内容を基に課題抽出、改善策、今後の方向性を議論した。

(議論内容)

- ・身近で検討できる戦略およびそのために必要な体制整備
- ・現科目で見直すべきもの
- ・即戦力強化に向けて人財の有効活用
- ・卒業生との連携強化

2. グループディスカッション内容 (4グループ: A, B, C, D)

	現状および課題	改善策および今後の方向性
A	<p>買い物に行くと「常磐大学」の活躍が目立つ カリキュラム改訂の目的が曖昧 <u>前回の改訂の目的</u> 国試合格率を上げるために科目を増やす 入学時の就職希望先と実際の就職先での相違 受験生に魅力を感じさせる方策が必要</p>	<p>学科の活躍をメディアによるアピール 学生のレベルや実情に応じて、カリキュラム改革が必要 実験・実習数や単位数(時間数)の読み方を見直す 選択科目を増やす →管理栄養士のニーズに合わせた科目 入学時と卒業時の意識調査が必要</p>
B	<p>大学在籍中に大学院のアピールがない 興味がある分野の専門性を学ぶ機会がない 授業が多いため専門性の科目を増やすのが難しい 管理栄養士の魅力が感じられていない 入学時の就職希望先と実際の就職先での相違 在宅・介護分野の管理栄養士の需要大 スポーツ栄養に興味ある学生が多いが、出口が少ない</p>	<p>総合演習Ⅰや管理栄養士入門を活用 臨地実習先の選択、選択科目を増やす 講義・実験・実習数や単位数(時間数)の精査 選択コースを作り、専門性を養う 卒業生の活躍する姿を通して魅力を伝える →学科HPやライン等を活用 陸上部が強い本学園の高校との連携</p>
C	<p>20年後の目標を想定 →全ライフステージの栄養学が重要(特に若年者) コア科目6割は何コマ、何時間必要か不明 大学独自科目4割に学生が考える力を養う科目 即戦力=実務経験と捉えれば、学部生は難しい 専門性をつける 臨地実習は、学生が選択できない状況</p>	<p>若年時に重点をおいた栄養指導 →本学園の保育園、中学、高校との連携 全科目のコア科目(基礎/応用)を明確にする 栄養学の理解は、サイエンスの基礎力が重要 →人文科学等の教養を養う、選択科目を増やす 即戦力=実習経験と捉えれば、臨地実習先の見直し 臨地実習先を学生が選択</p>
D	<p>データサイエンスが苦手 卒研でもSPSS等、統計処理ができない スポーツ栄養に興味ある学生が多いが、出口が少ない スポーツ栄養はしたいが、大学院に行きたくない 大学院との連携 学生の大学院の進学率が悪い</p>	<p>EBNが可能な授業を検討または各授業で取り入れる →EBNの強化 インターンを想定し、実際に現場で対応 →学生+α(教員)でサポートシステムを構築 大学院の魅力と具体的な授業・研究内容を伝える 研究への魅力を伝える</p>

3. まとめ

管理栄養士のモデルコアカリキュラムは、コア科目が6割、大学独自科目が4割とされている。しかし、本学は、何割がコア科目に相当するか不明である。そこで、まず1つ目は、どの科目がコア科目あるいは大学独自科目に相当するか、何割がコア科目となっているかを明らかにし、現科目を精査する。2つ目は、本研修で得た課題等を改め、改善策を精査する。3つ目に、本研究科および学科として何を目指すべきかについて将来構想を決める。最終的に、これらを踏まえた形でカリキュラム改訂する必要があると考える。

本研修により、本研究科および学科において多くの課題が明らかとなり、あわせて改善すべき点も挙げられたことから、将来構想を検討する貴重な情報として有意義な研修となった。

*本 FD 研修会は生活科学研究科食物健康科学専攻との合同で実施あった。

看護学研究科

【第 1 回 看護研究教育法ワークショップ】(資料 1)

1 日時： 2021 年 6 月 8 日 (火) 4 限

2 会場： 8 号館 3 階実習室

3 参加者： 看護学研究科教員 5 人
看護学部教員 (研究科に所属していない) 8 人

大学院で論文指導を担当した経験がある教員の数が多かったことから、学科の教員にも呼びかけ、卒業研究を含め、研究指導について考える機会とした。

4 内容： 研究指導に関するカードワーク

研究指導の際に難しさや悩ましさを感じた体験を経て大切にしていることやコツについて 1 人 5 枚のカード (付箋紙) に記入した後、共有した。

発言者が 1 枚のカードを説明した後、類似しているカードを書いたと自覚した人が発言者のカードに自分が書いたカードを寄せて貼り、説明することを繰り返した。

5 成果：

研究科に所属していない教員のグループでは、学生の思いを尊重する姿勢が共有されていた。一方、研究科に所属する教員のグループでは、同様の意見が共有されるだけでなく、文献リストの整理や研究のプロセスを見通したスケジューリングや短期目標の設定等、知識や情報と思考の整理に関する具体的な支援を心がけていることが共有された (資料 2)。そのためには RQ の洗練が必要である。しかし社会人経験が長く実践的包括的に思考する学生が RQ を絞り込む際には、学生を尊重するという支援に限界があることが推察された。そのためにそのために緩急をつけ指導していることも共有された。

6 次回の FD の方向性

前年度の FD の成果から、RQ を絞り込むために学生が経験した看護を聴き取ることは重要であるが、大学院で学ぶ学生が看護者から看護学の研究者に成長する間に生じていく (RQ を絞り込むようになる) 変化に気づき、緩急をつけ思考を促進するような指導を検討する必要があると考える。次回は、成人教育を専門とする教育学の研究者あるいは実践者から、社会人が RQ を絞り込んでいく過程に関する知識を得られる FD を計画したい。

(資料 1)

(資料 2)



【第2回】成人学習社としての成長を支える研究指導—RQの洗練に向けて—

- 1 日時： 2022年3月8日(木) 15時～17時
- 2 会場： 8号館 8101 配信
- 3 講師： 三輪建二 氏 (星槎大学大学院教育実践科 教授)
- 4 参加者： 看護学研究科教員 11人
看護学部教員(研究科に所属していない) 12人
外部の看護職者 5人
- 5 内容： 講演と振り返り

氏が翻訳したノールズの成人学習理論、ショーンの省察的実践成人学習理論をご説明いただくと共に、看護学教育の問題点(教え込む)が成人学習者に非効果的であるところのご指摘をいただいた。さらに氏の研究指導の実例をご紹介いただき、成人学習者に体験を語らせ、教員がその体験を理論に変換して研究に導く方法を学んだ。

具体的には「まぐろを刺身にする=RQを絞る」プロセスに於いて「いきなり先行研究をとという指導はしない」という衝撃的なご発言から、学生とディスカッションする際に十分聴き取り「学術のことばで返す」こと、ディスカッション後の省察(記述)を大切にしていること、「関連性、規模、実行可能性」の視点から学生自身に絞り込むよう促すこと等をご提案いただいた。

6 成果：

学生の豊かな経験からRQを絞り込むには、昨年度の成果である「学生の経験を聴く」ことに加え、その経験を理論の言葉に変換するという教員の役割が明確になった。また、短い修業年限で論文を完成させるには制限設定が必要であり、学生がRQを絞り込むことを考えるよう促していくという役割も理解できた。教員には、学生の体験を十分理解し、学問に位置付け、理論の言葉に変換するという力が求められることがわかり、努力する方向が明確になった。

(資料3)



看護学部

【看護学科】(専任教員 27 名)

テーマ：看護学科教員による伝達講習とテーマディスカッション

日時：2022年03月02日(水) 13:30~15:30

参加者：看護学科教員 25 名 (2 名欠席)

プログラム：

1. 研修報告

報告1「看護学教育支援における ICT 活用の可能性」 原島 利恵先生

内容：・看護学教育における ICT 活用の可能性 例) OSCE

- ・堅持したい看護学教育の本質で「看護教育の質」が問われるということ
- ・可変可能な方法の柔軟性から、効果的な教育方法を開発する必要性
- ・コロナ禍に巻き込まれずに「やるべきこと」を行っていく

報告2「多様な人々の理解・支援に向けた看護学教育の再考」松永 恵先生

内容：・看護学教育の継続的質改善 CQI (Continuous Quality Improvement)

- ・自学の強み「多様性」を捉え直す
 - ・アンコンシャスバイアスを知る, 気づく, 対処する
 - ・多様なセクシュアリティと医療
 - ・デザインエンジニアリングのケアへの応用

2. テーマディスカッション

報告2より, 身近なところからありたい姿「多様性」を考え, 自学の強みにつながる

以下のテーマを取りあげて検討することとした。

テーマ「ユニフォームの在り方ー本学らしいユニフォームとはー」

事前資料：

ダイバーシティを意識した看護衣へ 看護学部のユニフォーム 2020 年度新入生から刷新 / 「ジェンダーレス」制服を導入した韓国航空会社が反響呼ぶ。誕生の理由を聞いた / 【制服トレンド最前線】今後の教育はどうなる？ 加速する多様性時代は制服も変化／採用が増加する「ジェンダーレス制服」と 次世代型「ジャージみたいな制服」 / ー LGBT の生徒にも対応したジェンダーレス制服に関する親子の意識調査結果も公開 ー

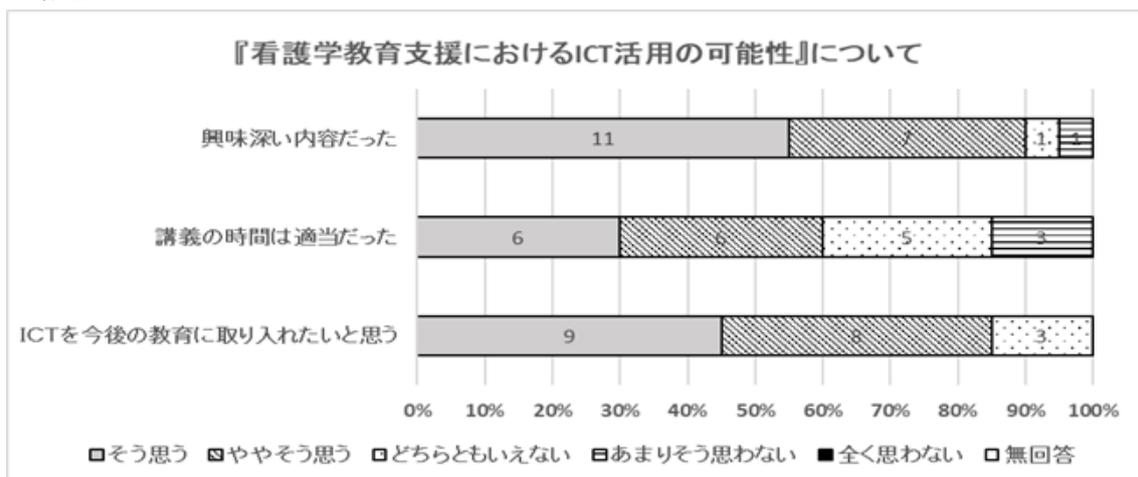
現在の茨キリ大看護学部のユニフォーム：男女の違い 色（水色とピンク）襟の形

グループディスカッション意見内容（参加者 25 名， 6 グループで実施）

- 本学のユニフォームの歴史と現状の理解
- ユニフォームへの愛着について
- ユニフォームに求められること
- 学生にとってのユニフォームとは
- 変更する場合の条件や選択方法
- 本学らしいユニフォームについて
 - ・時代とともに変革が必要 ジェンダーレス，多様性を認めること
 - ・学生が「このユニフォームが着たい」と思えること
 - ・受験生サイト・パンフレットへの掲載
 - ・シオンの歴史，伝統，愛着の継承 スクールカラー，ロゴを取り入れる
デザイン・色の具体的な工夫

3. 結果： 実施後アンケート結果(n=20, 回収率 80%)

報告 1



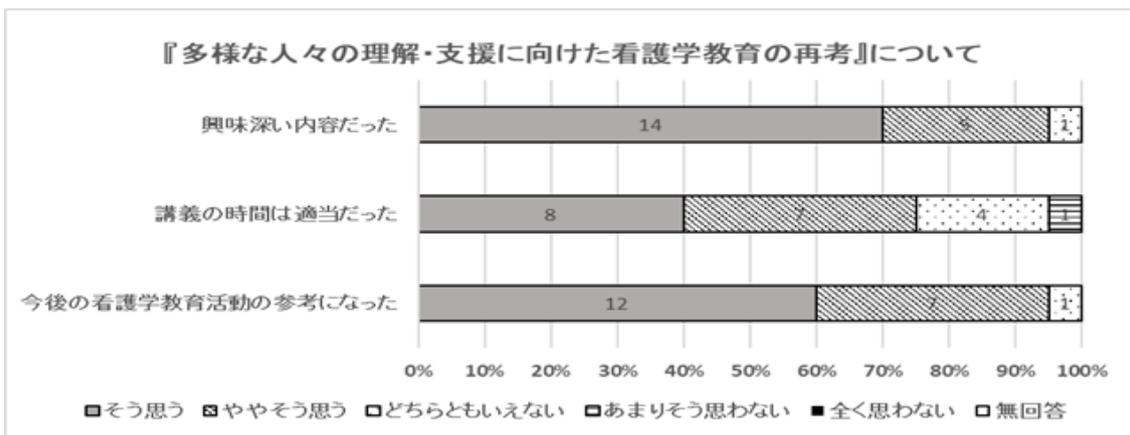
自由記述より（抜粋）

・この社会情勢の中、看護学教育をどのように進めるか柔軟に考えていくことや、看護学教育の本質を捉えていくことの必要性を原島先生の報告を聴いて改めて実感しました

・コロナに巻き込まれないで「やるべきことをやる」ということ、柔軟に対応すべきこと、堅守すべきことを明確にして看護教育を向上することが大切なのだと改めて考えました。また、苦手な分野ですが前向きに取り組もうと思いました。

・臨地施設へ出向けないときに、ICTの利用は興味深かった。

報告 2



自由記述より（抜粋）

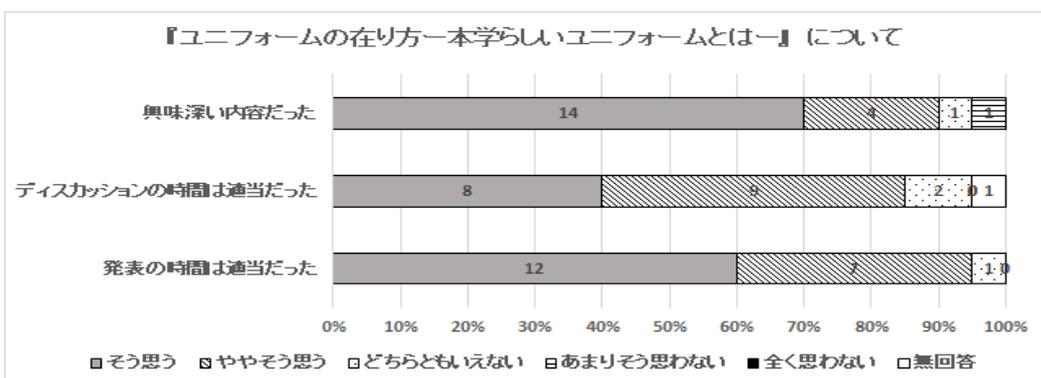
・看護教育の継続的な質改善モデルをふまえ、変化していく看護教育に対応するために、自分自身の物の見方や考え方を見直していくことの大切さを学びました。

・CQIについて松永先生が簡単に説明してくださり分かりやすかった。それと共に、自学の強みを考えていくこと必要性を認識できました。

・改めて世の中は何かと男女を区別しがちであり、自分はLGBTと無縁に生活してきた支障がなかったのでわからなかった。多様性の時代において、医療の現場においても施設レベルで配慮ができること。これから考えていかなければならないと思った。

・多様性を理解する、認め合うことは、口で言うよりも難しいことなのだと感じました。

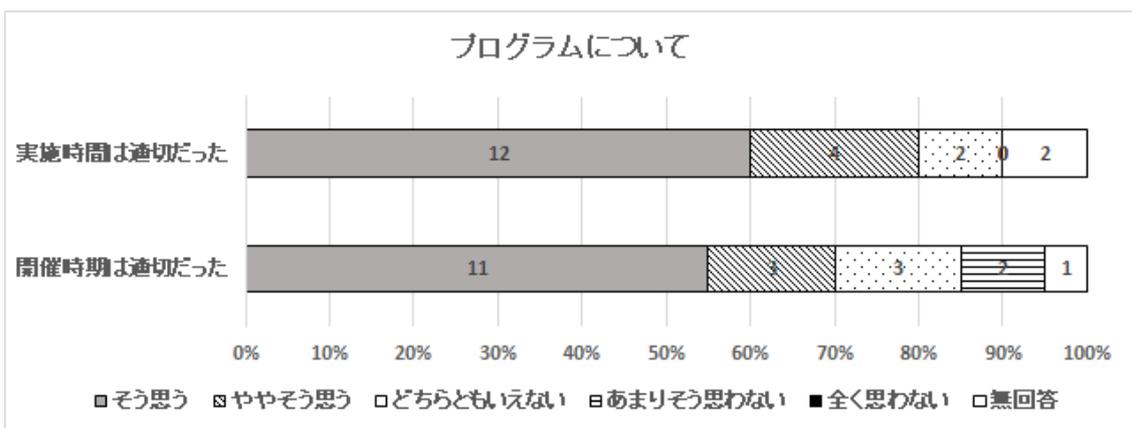
グループディスカッションについて



自由記述より（抜粋）

- ・本学でのユニフォームの歴史。ユニフォームを変更するにあたって必要なこと。今後どのようにして進めていくのがよいのかなど、大変参考になりました。
- ・今まで何気なく過ごしてきた身近な事柄に焦点を当てたこと、そこでの教員の価値観や考え方が知れたことはとても興味深かった。ディスカッションの時間が少し短かった。
- ・ユニフォームでここまで盛り上げられることに驚き、歴史的背景を知ることの重要性和今、ユニフォームを変更するのであれば何をどのように考えていくかを具体的に話し合えたところが良かった。

プログラム全体について



自由記述より（抜粋）

- ・教員間で情報を共有しやすいテーマで、とても有意義なディスカッションができました。栗原先生の総評にあった「本学の強み」を客観的にとらえることが必要な時期だと考えました。また、「変えられるもの」「変えてはならないもの」の見極めがとても大事だと思いました。
- ・せっかくの伝達講習ですので、もう少し時間があれば良かったと思います。普段、領域の枠を超えて教員同士が話をする機会が少ないので、今回のFDはとても良かったと思います。すぐにユニフォームを変えなければいけないとも思いませんが、せっかくなFDのテーマにとりあげたのですから、今日の話合いを次につなげることが大切に思いました。

3. まとめ

今年度は、伝達講習とテーマディスカッションの両方を1日で実施したため、特に研修報告の時間が少なかったことが反省点である。折角、貴重な学びの機会となる内容であったため、次年度は研修報告とFD研修会を分けて実施することが望ましいと考える。

テーマディスカッションについては、研修報告と関連性を持たせたこと、堅苦しくなく検討しやすいテーマ設定であったことは効果的であった。看護職として多様性、ジェンダーレスへの知識や配慮の必要性を理解しながらも、学生にとって重要なユニフォームについて、ジェンダーの観点から話し合うことをしていなかった。今回のディスカッ

ションをきっかけに、教員間の様々な考えを共有することができ、今後、継続して検討していくことのできる内容であったと考える。「看護の本質」は堅持しつつ、柔軟に多様性を取り入れ、学生、そして地域が求める茨城キリスト教大学看護学部として、ありたい姿を体現していくことが必要である。本研修により、教員としての無意識のものの見方を自覚し、改めて具体的で取り組み可能なことから「多様性」を検討しながら、自学の強みについても考えるきっかけとなり、有意義な研修であった。また、上記のアンケート結果より、概ね効果的な内容であったと評価された。

経営学部

テーマ：『成果を意識した教育について』

概要：専門学校教育と大学教育のそれぞれの現場を経験し、本学において全学教養課程センターの立ち上げに関わった経緯から、専門学校と大学の学びの質の違い、本学が重視する教養教育と専門科目の関わりなどについてお話し頂き、今後の大学として、また本学としての教育の在り方について考えるきっかけになることが期待出来、教育の質の向上につながることを期待出来る。

講師：本学経営学部 栗原正樹 准教授

実施日時：2022年3月7日（月）12:40～14:10

会場：オンライン実施

参加者：田口尚史，申美花，澤端智良，栗原正樹，長島正浩，菅野雅子，佐藤和明，渡部暢，Yodtomorn Pimprapa（報告者），古井仁，三上司（Teams への参加順に記載）

以上